

カキ高接更新法に関する検討

第1報 高接方法の差異と高接品種の生育

中野孝美・吉岡靖盛・長田一美

(福岡県農業技術課)

NAKANO. T., YOSHI OKA. Y., and OSADA. K.

Studies on the Top-working of Japanese Persimmon Trees.

(I) Effect of Some Graftings on Growth of Renewal Variety.

カキの高接更新を行なうにあたっては、現在の収量を極端に低下させずに急速に高接品種の生長をはかることが必要である。福岡県は「富有」の産地であるが、新品種「伊豆」の増植普及とあわせて、既存の「富有」等の高接更新を図っているが、これに適合した合理的な高接更新法について検討しているので報告する。

(1) 試験の方法

30年生の「富有」約40aを供試し、最終的には全園を更新する目標で1970年に全樹の $\frac{1}{2}$ を隔列ごと対角線上のものに高接した。処理の方法は、1)、主枝・亜主枝接区。2)、主枝・亜主枝接で力枝1本残した区。3)、同じく力枝4本残した区。4)、同じく主幹延長の中心主枝を残した区。5)、側枝接区の5つの方法をとった(第1表)。

(2) 結果および考察

1)、生長量と樹冠拡大の状態は側枝接区がすぐれ、ついで主枝・亜主枝接区であった。しかし、側枝接は接木と支柱添え等の管理に労多く大面積の処理については困難性がある。主幹延長主枝を残した区においては高接品種の生長がかなり抑制され、2年目に芯抜きを必要とした。

2)、高接初年度の残存枝の結実状態は2区と3区は軽い剪定としたにもかかわらず結実が不安定であった。収量については残した枝が多いほど高接による減収率は小さい。しかし、力枝4本残した区においては接木位置の上昇で整枝と管理上に問題が残る。

3)、以上の結果から、実用的な高接更新法としては、目的とする高接品種の急速な樹冠拡大の立場からすれば、小規模の場合には側枝接の方法が効果的であるが、一般的には1区または2区の主枝・亜主枝接の方法をとることが適当と考えられる。

第1表 高接処理区別調査成績(1樹当り)

項 目	接 木		生長枝数		枝の総伸長量		一枝当平均長		樹 容 積		収 量	
	個所数	所要時間	'70	'71	'70	'71	'70	'71	'70	'71	'70 (残存枝)	'71 (残存数+高接枝)
1. 主枝・亜主枝接区	7	42分	本 30	本 201	cm 3,239	cm 5,707	cm 109	cm 28	m ³ 10.3	m ³ 14.5	kg 0	kg 1.4
2. 全上力枝1本残好区	7	42	27	175	2,795	6,485	104	37	6.9	13.3	6.8	11.6
3. 全上力枝4本残存区	9	54	28	176	2,898	7,618	104	43	6.0	12.6	16.0	48.0
4. 同上主幹延長主枝残存区	5	30	8	54	400	2,843	50	53	1.5	5.3	13.7	2.7
5. 側 枝 接 区	23	150	34	377	3,541	12,683	104	34	30.6	44.0	10.0	13.8